



～ 介護制度を守るために ～

2023年最初のえん通信です。ウクライナでの戦争が続き、物価は高騰し、新型コロナウイルス第8波は死者の数は過去最高、明るいニュースが少ない年明けです。今年こそコロナ禍が明け、戦争が終わり、ホッとできる日が来ることを願っています。

年が明けてしまいましたが、昨年7月、『あなたはどこで死にたいですか？～認知症でも自分らしく生きられる社会へ～』を出版しました。地味な内容にもかかわらず新聞の書評や新刊案内などで取り上げられるなど、たくさんの反響がありました。この本のベースはえんが集積した膨大な記録です。えんは「記録を残すこと」を大切に、年度ごとに法人全体と各事業の報告をまとめた総会資料は介護保険スタート前までさかのぼって集積されています。書くことが不得手な職員を叱咤激励して残した記録が、この本に活かされました。

書籍出版を決意させたのは、上野千鶴子さんの『在宅ひとり死のススメ』（文春新書）でした。介護保険のサービスが削減され、負担は増え、在宅にしる施設にしる望む支援を受けるのが困難になるばかりです。そんな中で「ひとり死、大丈夫!」と太鼓判を押されたのですが、昨今の介護保険やサービスの状況を見ると、とてもじゃないけど難しい。これは介護現場から現実を伝えなくてはならない、と思い立ったのです。

すると出版されて間もなく、上野千鶴子さんが「介護現場からの声を伝えるこんな本が欲しかった」とツイートされてビックリ。そこで対談をお願いし、「なかまある～在宅ひとり死は可能か～」（朝日新聞認知症WEBサイト、）に掲載されました。「在宅ひとり死」を主張するのは、ケアマネジャーや介護家族が施設入所をゴールにする傾向が強いことに対する反論とのこと。確かにその傾向はあり、在宅の可能性を探る努力は求められて当然です。「最期まで生き切ることができればいい。それを支えるのが制度です。その介護保険制度を守っていくために一緒に闘いましょう（上野）」と対談を締めくくりました。

書籍のあとがきに「スタッフの皆さん、これまでにえんのサービスを利用されたたくさんの方々、あなたがたのおかげでこの本が出来上がりました」と記しましたが、ここに支えてくださった「地域の皆さん」を加えます。心から御礼申し上げます。

代表理事 小島美里